**東北における大津波被災地の観光振興に関する考察**

A Study on Tourism Development in Tsunami Disaster Areas in Japan

帝京平成大学現代ライフ学部レジャービジネス学科教授

小浪博英

Hirohide KONAMI

キーワード　：　津波、被災地、観光振興

Keywords　：　Tsunami, Disaster area, Tourism development

１．被災の概要

地震ならびに大津波による被害については既に多くの報告がなされているのでここで繰り返すことはしないが、観光に関してだけ整理してみると次のようになる。

　先ず情報であるが、主としてテレビ、新聞、雑誌などによる一般的コミュニケーションツールがその主体であり、被災から２−３日の間はどこの観光地がどのようになっているかを知るよしもなく、人づてに花巻は大丈夫とか、山形と米沢は大丈夫とかの噂が入る程度であった。国土地理院が発表した浸水地域図は縮尺が小さかったが、どこが津波による浸水を受けた地域かがある程度は分かるものであった。しかし、被災があまりにも広範囲であったため、ホテル、旅館等の個々に被災状況が一般に伝達されることはなかった。

　交通については地震によりズタズタにされた東北新幹線、津波により線路や駅舎を部分的に失ったしまった臨海部の鉄道、津波により橋梁を流されてしまった幹線道路、ガソリンがなくなってしまったガソリンスタンドなど、滞在中の観光客の帰宅さえまともにはできない状況であった。数日後に国土交通省による、内陸部の南北幹線道路と、そこから海岸方向につなげる十数本の東西路線が開通された。これによりやっと救援物資や救援隊を送るとともに、被災民を避難させることができるようになり、岩手県遠野市などはそのための後方支援基地として極めて有効に機能した。また、被災地においては瓦礫により殆ど全ての交通路が遮断され、残された盛土構造の堰堤や道路・線路等を伝って歩くのが精一杯であった。神戸の場合は４車線以上の広幅員道路がかろうじて交通路として機能したが、津波の場合はそれらの空間も瓦礫、流された自動車や船などで埋まってしまったのである。

　食事や宿泊の施設についての被災は、津波により壊滅したところがある一方では、松島町のように約1,200名の被災時の宿泊客が一人の怪我人もなく無事帰宅できた例もある。レストランやレストハウスが少しずつ復旧しつつあるが、被災市街地の復興は街ごとにばらつきが大きい。これは経営者の考えがまちまちであることと、政府の財政的支援措置や市街地復興計画が未だ不明確であることによると思われる。

　観光入り込み客は徐々に戻りつつあるものの、地域によってはまだ受け入れできない状況のところもある。ところで、各地の観光協会のホームページを開いてみて感じることは、被災後の状況がどうなっていて、今の受け入れ態勢がどうなのかについての的確な情報を伝えていないところが多い。

２．復興の視点

　一般的な復興計画については多くの議論がなされているが、観光についての復興論は未だ多くはない。一般的な復興計画の視点は避難施設または避難路を整備した上での現地復興、盛土をした上での現地復興、高台への移転などが議論されている。明治以降だけでも明治29年、昭和8年、昭和35年、そして今回と、4回も大きな津波に襲われた地域であるから当然ではあるが、是非とも従来にも増した復興が図られてもらいたいものである。

　観光面の視点からは、観光資源、交通施設、受け入れ施設、受け入れ態勢の復興が必要となる。観光資源については従来からの歴史遺産や自然資源の他に、今回の被災施設や被災建物などが考えられるが、それだけではリピーターを獲得することが難しいと思われる。そこには何らかの魅力的な工夫と人材の育成が必要である。

　幸いにして、文化財についての被害は瑞巌寺での漆喰壁の一部崩落、福島県阿弥陀堂の彫刻の破損、茨城県旧弘道館における学生警鐘の倒壊などであり、自然資源では松島全域での植物被害などがあったが、学生警鐘の釣り鐘も本物は別途保存されており、被害は何れも意外なほど軽微であった。

　そこで、被災前と同様の観光資源は復興できるとして、リピーターを獲得するための更なる戦略を考えなくてはならない。それには三つの方策を提案したい。

　ひとつは災害を題材にして、被災建物や被災物件を安全に保存して、観光客に記憶してもらうともに、可能であれば津波のすごさを3D映像で体験できるような記念館の建設であろう。記念館は今後地域に育つ子供達の教育にも利用できるものとしたい。

　ふたつ目は地元の頑張りである。NHKで放映されていた大分県豊後高田市の「学びの21世紀塾」や「Cook It Raw」なども参考になる。前者は市民の中から講師を選任して、コンピューター、英語、算数、理科、ソロバンなどに加えて、地域の歴史や伝統工芸、伝統芸能などを子供達に教えて学力を向上させ、県内最下位に近かった子供達の学力を全県一番に押し上げ、結果として子供達の故郷への思いを強くしたものである。後者は世界のトップシェフ14名による石川県の食材を使った料理腕比べであり、地元工芸家が作る器と合わせて斬新なメニューを提供するものである。

　三つ目は、近年盛んになっている「まち婚」なる集団お見合いも良いかもしれない。これは地元飲食店街とタイアップして会費数千円を払った男女各百人から数百人くらいの登録者に一定時間内のフリードリンクと料理を提供するものである。参加者は登録証であるリストバンドを確認してお互いに近づき、意気投合すればカップルになるものである。不正な参加者を排除するため、申し込みは２−３人のグループでさせる方法もある。高崎や前橋の例を見ると相当数の若者が地区外から来ており、地域商店街の活性化と婚活という一石二鳥の効果がある。

　三陸鉄道の赤沼氏によれば、世界を旅する日本人が最後に訪れるのが三陸であり、何故三陸がそのように後回しになるのかと嘆いていたが、それはやはり情報と資源と人材の不足であろうと考えられる。新たな観光資源を発掘し、それをHPなどで発信し、市民講師による21世紀塾で人材を育成することがこの地域での観光振興のための最良の戦略であろうと考えられる。

３．アクセスの改善

　観光地の交通としては、極めて便利にするか、逆に、思い切りレトロ調にするかであろう。交通そのものを観光資源にしてしまうのである。岩手県の場合、いわゆる中通りと浜通りとは狭いところで数十キロ、広いところでは約百キロの距離があり、これを克服することは極めて困難である。景観が優れていれば交通路そのものが観光資源であるが、残念ながらそのような交通路は今回の被災地区には見当たらない。従って、三陸鉄道は駅舎や車両そのものに魅力付けを行ったが、全ての鉄道線区やバス路線について工夫する必要がある。また、道路については従来の道の駅を一層充実させるとともに、道路沿いの隠れた観光資源を探し出し、国道番号ではない、もっと魅力的な名前を考えなければならない。今回の現地視察では一関・陸前高田間、釜石・花巻間、および盛岡・宮古間をバスで走ることができたが、それぞれの１〜２時間が少し退屈であった。また、航空についても和製LCCが設立されたので、三沢、花巻、仙台、福島の各空港には便利の良い格安のバス路線やレンタカーを用意すべきである。それが温泉地での格安宿泊代とセットになっていれば更に効果的だと思われる。

４．まとめ

　1000年に一回といわれる大災害であれば、誰しもその怖いもの見たさと復興状況に興味をもつものである。そこをどのように活かすかが問われている。幸い、平泉が世界遺産になって、東北観光の世界的拠点が生まれた。これと大都市仙台、東北新幹線、LCC航空路線、温泉と美味しい飲食があれば、あとは情報と人材であろう。

　とにかく英語を含むホームページで世界に発信することである。世界の人々はそれを待っているはずである。旧に倍する復興が，世界から忘れられないうちに進むことを願ってやまない。